

---

# 成り損ないと称されて

畑田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

成り損ないと称されて

### 【Nコード】

N9725W

### 【作者名】

畑田

### 【あらすじ】

特になし。夏休みだというのに自宅でゆっくりと過ごすことのできない成り損ないと称された部活が部活動とは全く関係のない事に首を突っ込む、といった感じですよ。

## 夏休み返上り初日 (前書き)

フィクションです。

フィクションでなかったら俺が驚きですね。

とりあえず、股間が寒くなるそんな季節。

皆さん風邪をひかないようお過ごしください。

## 夏休み返上り初日

他の文系の部活動は皆、夏のまさに地獄のような暑さから自主的に休部という形になっていくというのに、文系部の成りそこないである所の我が部活が生粋の部活動よりも活動的なことに疑問を抱く。

しかし抱いても暑さのせいで思考は回らない。何より日頃の活動内容とトチ狂った部長の言動や行動に慣れ、染まり、溺れてしまった俺が今さら思考を巡らせたところで何かしらの解決案が見つかるとも思えない。

そう認識したとき、嗚呼俺はもう来るところまで来ちゃったんだな、と溜息を吐き後悔さえした。

そんな様子を見ていた人物が、会議室で使われていた物を我が部長が窃盗もとい拝借してきた長机越しに話を振ってきた。

「ため息つくなよ、どうせやることなんてなかったんだろ？」

山本だ。つい最近まで野球部所属で、特に良くも悪くもない顔立ちのくせに女子におもてになる山本だ。

「失礼な奴だな」

「なら何か用事でしょ？」

「・・・いいや」

あるわけがない。あるのならそちらの方を迷わず優先しているね。何も用事が無いからここに来たんだ。個人的には用事がなかるうが訪れたくはないが、理由も無しに部長様の命令を無視すれば後々に何かしらのペナルティが待ち受けているのでそうするほかない。

山本は机の下へと身体を潜らせ持参したバツクの中から飲み物を取り出す。

小型冷蔵庫でもあればキンキンに冷えた物を飲めるのだろうけどうちの部室にそんな便利なものはない。冷えた物を飲みたいなら売店のところに行くか自分の家で凍らして持って来るかのどち

らかだ。

そしてどうやら山本は後者のようで満足するまで飲み下した後はそれを頭へと当て冷たさを身体で実感していた。ちなみに冷蔵庫が無いことから察してくれたかもしれないが冷房機、クーラーもない他の部活は両方ともそろっているというのになぜ我が部活動だけは手配されていないのだろうか？やはり文系部のなりそこないだからだろうか……。

いや、理由はしつかりと分かっているんだけどさ。

そんな成りそこないの部の夏への対象法は窓と扉を全開にすると今となつては原始的なものであり風のない今日、効果はいま一つ。蚊が飛んでくるかどうか心配になるがその点については我が部のしつかり者、西都崎という後輩女子生徒が蚊取り線香で対処済み。おかげで現在はいかゆみの苛立ちもなく線香の香が漂うのみだ。

「それより姿を見せない我が部長様は何のために俺たちを招集したんだ？」

「姿が見えないのは西都崎もそうだな」

入ってきたときから思っていたことだった。俺はてっきりいつも通りにあの横柄な我が部長様が待ちかまえているのかと予想していたんだが居たのはこの山本だけだった。かといってその部長と西都崎がここを訪れていないわけではないようで、いつも二人が利用している席に二人の鞆と思われるものが置いてある。

(つまり一度は訪れているということか)

山本も二人の行方は知らないようで俺が来た時と同様に既に二人の姿はなく鞆のみだったという。

夏としては環境の悪いこの部室で特にやることがない俺に山本が自身で持参していたらしいチェスを持ち出し一緒にやらないかと掛け合ってきた。

「いいけど、俺チェスなんてやったことないぞ」

「別にかまわねえよ、やりながら教えるから」

そっいいながら既にチェスの駒を盤上に並べ始めている山本。そ

の様子から恐らく俺が断つてもこの暇な時間を過ごしたくがないために何かしらの言葉を並べ俺を言いくるめる気が満々だったのだと思える。

まあ俺だってこの暇な時間に汗をただ流し過ごすなんて堪えられなかっただろうから別にかまわないさ。

そうしてチエスを山本と交え約一時間。夏の太陽は一層高く昇り、蝉の鳴き声は雨のように降り注ぎ、蚊取り線香の灯が半分を侵食し五戦目となるチエスの指し合いを俺の五度目の勝利で収め本当にこれが山本のチエス盤なのかと疑問が沸き出てきた頃、開け放たれた扉の向こう側つまりは廊下の方からドタバタと聞き覚えのある力強い足音がこの部室へと向かい近づいてきた。

敗者である山本が駒を並べるのをすぐさま止め、俺と同じくそれを向かい入れる準備をする。準備とはいってもただ扉側に体を向ける程度の事だけ。自然とそれを行ってしまうのは我が部長様の調教の賜物だろう。認めたくはないがな。

足音が最大となったと同時に声が轟く。

「遅れてごめん！」

謝罪の言葉とは裏腹に満面笑みのその顔に詫びの情緒なく姿勢は平身低頭とは行かずむしろ片手を上げ友達に挨拶するように手を上げていてというもので、実際友達なのだから礼儀だとか遅れてきたのだからもう少し態度を改めたらどうなのだとか言うべきでないのかもしれないが親しき仲にも礼儀ありと言葉があるように親しい仲にも礼儀は必要。よって遅れて来たこいつに文句は当然。

短髪というよりショートカットといったほうがニュアンス的に合っている長さで地毛の金髪頭、校則違反のはずであるピアスを身につけている身長158センチ、体重不明、胸は目測Bカップギリギリ、右利き右投げ、好きな言葉は〇〇〇の我が団長様、宮川ユリに文句を言っちゃった。

「本当に悪いと思っっているのか？一時間も待ってただぞ」

届いた文句はどうも悪い所へと届いてしまったらしく部長様は気

にくわないとばかりにあつというまに不機嫌な表情へと変わってしまった。

「何？文句あるの？分かってないようだから言うけど私たちは今グラウンドで声を張り上げている野球部が練習を始めた頃から居たんだから本来遅れているのはそっちなの、だから謝らないといけないのはあんたの方」

「ならどうして謝ったんだ」

「私が謝ったのは山本に対して、あんたじゃない」  
「ほ、ほう」

中々癪に障る事をいやがるこの女。何より待たせたのは山本もだろうが。

差別反対！

「西戸崎の奴はどうしてるんだ？」

俺とは全く違う方向を気にしていた山本が話に割って入る。

「楓ちゃん？楓ちゃんならもうすぐ追いついて来るはずよ」

話の筋と先ほどの足音から推察するに全力で走ってきたこの部長に西戸崎は付いてこれなかったのだろう。

ここで俺たち二人は何処に行っていたかとは聞かない。必要な事なら勝手に宮川が口を開きペラペラと喋り始めることを知っていたからだ。同じく今日俺達が呼ばれた理由ももう間もなくこいつが熱弁してくれるだろうからそれも聞かないし訪ねない。

汗だくの宮川は山本が片手に持っている氷漬けのペットボトルに目をつけ喉を潤そうと手を伸ばす。山本も拒むことなくそれを受け渡し宮川は喉を潤すことができた。

その光景を見ているとつい先日、学校が夏休みへと入る少し前のことが記憶に蘇る。今日のように暑いあの日、凍っているわけでも冷たいわけでもないスポーツドリンクを汗だくの宮川に分け与えてやるうと思っただが宮川はそれをありえないとばかりに完全に拒否。

体の部位全てを使い全否定。どうしてそこまで嫌がるのかと訊ね

てみればあんたが口にしたものなんて飲みたくないとの事だった。一年以上の付き合いとなるにもかかわらずそこまでの信用を勝ち得ていない事にショックが大きく俺はその後しばらく棒立ちの状態でその場を過ごした。宮川はというと今のように山本が手にしている凍り漬の俺と全く同じスポーツドリンクを他の生徒の下へ貰いに走っていった。

本当に『俺の物』が駄目なのか、とあの時は相当なショックで翌日もこいつに顔を合わせるのが怖かったな。

「すみません遅れました」

とここで先ほどから会話にちらほらと出てきていた後輩一年の新人西戸崎が登場。こちらは宮川とは違い平身低頭、謝罪の意を露わにした態度であった。

相変わらずいい子だ。

息が荒れている彼女に山本が再び飲み物を渡そうとするが持参しているから結構と断られた。何気ないようなやりとりだが個人的には嬉しい出来事である。

「で、今日は何をするために集めたんだ」

西戸崎はもう既に事の内容を知っているかもしれないが俺と山本は知らない。

「ふふん、よくぞ聞いた」

金髪女の宮川は右手人差し指だけを立てて左右に振りながら自慢げに語り出す。

「私たち部活動は他の部活動と同等の扱いをなぜか受けておりません」

なぜかって、本来は3年の同好会期間を経て正式な部活動へとなる所を八方手を尽くして、生徒会や校長を言いくるめ創設わずか3ヶ月で正式な部へと昇格した俺達団体だ。そんな迷惑極まりない掟破りな連中が行う部活動にタダではないクーラーや冷蔵庫を他の部屋にはあるからといって配給しようなんて思わないさ。世間からは活動内容から文芸部のなりそこないとまで言われているしな。とい

うか部活動費用は回してくれているのだからむしろ感謝するべきだ。問題点については考えれば考えるほどこちらの非であることが分かるというのに我が部長様はどうも生徒会側に問題があると感じているようで、続く言葉は生徒会への辛辣なコメントだった。

「我が部がまだ同好会だった頃、我々の輝かしい功績のあまり、あの禿げズラ校長と生けすかない眼鏡会長が正式に部へと昇格したもののそれは世間からの批判の言葉を怖がったの処置でありました。実際はこの様に夏場は窓を開け蚊取り線香を四隅におき蚊の脅威に怯えながら過ごしていて、冬は窓を閉めても隙間風が酷く我々は絵画の前で倒れた少年と犬になる寸前であります」

演説風、ではなく本人にとってはまさに演説であるだろう話の中には虚構と事実が入り混じり山本と俺の脳が事実確認に追われる始末となっている。西戸崎はこの部室で未だ過ごした事のない未体験の冬の話に不安の顔を見せて自分にも関係がある話なのだと実感したのか真剣に話を聞いている。西都崎の反応からここで話を聞かされていないのだと察した。

俺たち三人はそういった状態に追いやられながらも歩みを進める部長に寸分狂わず体を回し常に正面を向ける。

やがて、二つ同じものをつなげた長机の奥にある愛用の椅子の前へと立つと宮川ユリはこの後、今年の夏で恐らく最も身の程を知らない発言をすることになる。

「このままでは我が部が存続しても我が部員は皆天国へと旅立ってしまう恐れがあります。生徒会に救いの手を求めても差し伸べられるわけもない。我々は見捨てられたのです！ならどうするか！はい、キョウカ」

振られていた人差し指で指される俺。

急な展開に少しばかり戸惑ったが必死に回答を思索した結果この部長が言いだしそうな答えを一つ導き出した。

「自分たちで何とかする」

「正解！」

両手で大きく拍手を一つ。

パン。

「そう、救いの手が無いのなら自分たちでどうにかしなくちゃいけない！」

火がついた宮川の演説を止められるものが居たら見てみたいね。

「そう思った私の下へある吉報が舞い込んできたわ！」

「吉報？」

西戸崎のその疑問に対する答えがこの夏もつとも馬鹿で愚かな発言であり、俺達部員メンバー以外までもがこの夏の数日間を無駄に過ごす原因となる。

「晩夏商店街主催の野球大会。参加者不問、必要人数は11人、そして景品はクーラーと百万円の豪華な品ぞろえ！」

「おい、まさかお前」

嫌な予感がした。とてつもなく嫌な予感がしたんだ。宮川にとって吉報であるかもしれないが俺たちにとってこそそれが吉報であるかとは限らない。むしろこいつがやることなす事は俺たちにとっては凶報な事ばかりだ。

だから問いかけたというのに、こいつは聞く耳を持たない。

分かっているさ、そんなことは部員第一号であるこの俺が一番よく理解している。

我が部長様は

「我が部は持てる限りの全勢力と力でこの大会に参加し優勝します！」

身勝手に大馬鹿なのだ。

夏休み返上り初日 (後書き)

御目を汚してすみませんでした。  
また拝読ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9725w/>

---

成り損ないと称されて

2011年9月24日03時29分発行